

当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」（2015年度第3回（通算第3回）研究会）

Title: Typological Study on “Altaic-type” Languages (The 3rd meeting)

日時：2016年1月30日(土)

Date/Time: 30th Jan. 2016

場所：AA 研マルチメディアセミナー室 (306)

Venue: Room 306 (Multimedia Seminar Room), ILCAA

Language: Japanese

1. バダガロフ, ジャルガル・バヤンダラエヴィチ (AA 研外国人研究員)

‘Grammaticalization of *a- and *bü- in Buryad’ (in English)

(要旨) 現代のモンゴル諸語および過去のモンゴル諸語の記録から、モンゴル諸語には to be に該当する動詞が3種類 (*a-, *bü-, bayi-) 存在することがわかる。これらがそれぞれ文法化したことにより、さまざまな文法的・語用論的機能を担うようになった。本発表ではその多様化のあらわれとして、ブリヤート語における*a-, *bü- 起源の文法的要素の機能と用法を概観した。

2. 渡辺己 (AA研所員)

「セイリッシュ語から見る「アルタイ型」」

(要旨) 本発表では、北米のセイリッシュ語と、いわゆるアルタイ型言語の諸特徴を対照したものである。とくに、アルタイ型言語において特徴的な「多様な格の体系」と「節連鎖」に焦点をあて、同じような内容をセイリッシュ語（とくに発表者が研究対象とするスライアモン語）ではどのような方法であらわすのかを概観した。日本語では多様な格助詞が存在し、名詞とその他の語との関係を表しわけののに対し、スライアモン語では正格と斜格の2種類しか用いられない点、アルタイ型諸言語ではconverbが非常に発達しており、非常に多くの節を次々と連鎖させうる特徴を持つのに対し、スライアモン語では節連鎖が非常に限られている点が対照的な差異となっている。また、複数の拘束形態素が構成されてはじめて発話可能となるスライアモン語は、膠着の特徴をもつアルタイ型諸言語よりもむしろ複数の語を構成することではじめて文として発話可能となる中国語（孤立語）により近い特徴を有するのではないかという点を指摘した。

3. 江畑冬生（AA研共同研究員，新潟大学）

「統語法から見た日本語動詞の活用体系」*

（要旨）本発表は日本語動詞の活用体系について論じた。日本語動詞の活用体系に関するこれまでの研究は形態と意味について考察したものがほとんどであり，統語法を考慮していない。本発表では，統語法との関連を基準としたアプローチによりまず屈折接辞を定め，それに基づいて動詞の活用体系を提示した。結論として提示した活用体系が示すように，日本語の動詞には統語的分布を示す屈折接辞が最大で1つ付加されるという特徴がある。屈折接辞に後続する拘束形式はすべて接語である。動詞には13個の屈折形式が認められる。屈折形式とそれが現れうる統語的環境は一対一に対応するものではない。動詞の屈折形式は，主節ではさらにムード・テンス・肯否が区別されるが，連体節ではテンスのみが，連用節では肯否のみが区別される。

* 本発表内容は同タイトルの既公刊論文（『人文科学研究』（新潟大学人文学部）133: pp.1-19所収）に基づく。

文責：山越康裕